サイレン

田村　堅幹（大正８年生まれ）

昭和 12 年 7 月 7 日に始まった日華事変で、近衛内閣は不拡大方針をとりながらも、現地解決に兵力を投入すると言う矛盾から、泥沼の全面戦争へと発展していった。

高田では倉林連隊長の歩兵第 58 連隊を復活させ、9 月 25 日、上海へ向けて出発させた。

本校（高田中学）からも教練科の先生他五名の方々が応召。特に倉林部隊は上海新木橋の作戦で多くの戦死者を出した。

先生は、平生から謹厳篤実、温厚寡黙であったが、「気を付けえー！」と長く尾を引く独特の号令が、サイレンがいっせいに鳴り響くようであったため、〝サイレン〟という渾名をつけられ、生徒から親しまれていた。教練の教官であっても、授業中はどんな時にも生徒を叩いた事がなく、逆に銃器室で銃の手入れ中に、いたずらな生徒に長時間閉じ込められたようなことが度々あった。昭和 13 年 2 月 3 日、徐州作戦において、新木橋、上窰の激戦で突撃中の身に数弾を浴び、自ら範を示された。享年44 歳。後の学校慰霊祭では、当時 5 歳の長女が参列者の涙を誘った。

ところで、本来のサイレンについて調べてみると、高田ではそれまでの午砲（ドン）を大正 11 年に廃止し、昭和 3 年 2 月、現在の東北電力（株）上越営業所の前身である、中央電気（株）本社の新築に際し、屋上にサイレン室を設け、社員の手で市民に正確な時刻を知らせるようになった。同社には、つぎのような当時の記録が残っている。

時報は年中無休とし、その時刻および時間は左の通りとす

常時

一　時刻　自4 月 1 日　至10 月 31 日　毎日午前 7 時と正午

　　自11 月 1 日　至3 月 31 日　毎日午前 8 時と正午

一　時間　時報時間は 40 秒とし、終止の刹那を以て時刻とす

昭和 30 年頃、消防署の望楼にサイレンが取り付けられたが、おそらくその頃に中央電気（株）の屋上からサイレンが撤去されたものと思われる。そしてその後、長い間、正確な「時」を知らせ、火災報知と防空の役目を果たしたサイレンは、時代の流れの中に消えていったのだが、私にとってはそれに重ねて、「サイレン」と呼ばれた教官の慰霊祭に参列した 5 歳の長女が成人して、東北電力に勤務していたことを知り、サイレンはある時代の空気や記憶を甦らせる、感慨深いものになっている。